ある少年の延長戦。

匿名希望

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある神様からの説明も無しに自分は転生した。

どこかで見た気がする風景、常夏の日差しと赤い海。汎用人型決戦兵器にフォースチルドレン…

ああ、

「自分は乗りますよ、だって乗れるんですから」

エヴァの世界で死ぬまで生きることになった少年。彼の延長戦はどんな結末になっていくのだろうか？

処女作です、お見苦しい点や設定が違うとか矛盾点が出てくると思います。苦手な方はページを戻って下さい。

※更新は不定期です

目　次

おわりとはじまり ―――― 1

おわりとはじまり

深い闇の中をさ迷う。言葉にすればあっけないものだが実際にするとその辛さが分かる

もう既に何時間歩いているのだろうか。

この空間の中に時間を示す物や方角を調べる物がない

景色なんて無い上にこの空間の始まりの場所も分からない。

（正に無い無い尽くし、どうしたものかね）

なんでこんなところにいるのかやどうやって来たのか、もしかしたら連れてこられたのかも知れないが、今の自分にはそれを調べることは出来ない。

（それでも、何も分からないのなら分かるまで進むしかないか）

足元から素足独特ペタペタという足音がする。目から入る情報が少ない分、聴覚は鋭敏になっているらしい。

大丈夫、まだいける。そう自分に言い続ける

足元のペタペタと一緒に歩く

何時もの風景を取り戻したら、写真でもとってみようと自分に言う。

まだペタペタも元気だ

次に食べるご飯は肉じゃがにしよう、黒い食べ物はしばらく要らない。次の献立を決める。

ペタペタペタ

ジャージを洗わないと。忘れていた。

ペタペタ

今、友人は何をしているのだろうか

ペタ・・・ペタ・・・

自分の事を思っていてくれているのだろうか

ペタ・・・

自分は無事に帰れるのだろうか

見渡す限り黒の空間をつらつらと歩いているとつい思考が負の方

向に転がっていく

ここを歩き続けていたら何時か死んでしまうのではないか？
むしろもうここは死の世界で、歩くことすら無駄なのではないか？

歩き始めこそ曖昧な、なんとかなるだろうという心で歩いてきていたが、ぐちゃぐちゃになった方向感覚や時間の感覚、何故か疲れが来ない身体は確実に心を蝕んで来ていた。
（もう・・・止めてしまおうか？）
ふとそう思った。
そうするとどうだろう、身体はあっという間に動かなくなり、猛烈な眠気が襲ってくる。
膝から崩れ落ちる、手が出ずに顔から地面に落ちていく。
パシャッ
「・・・水？」
いつの間にか足元は生温い水溜まりのようになっていたらしい、気がつかなかった。
温かくも冷たくもない、そんな微妙な温度の水。
例えるならこれは…
「血、みたいだなぁ・・・」
色は黒いが、水じゃないトロトロ感がそんな気を加速させる。
「そう言えば」
自分が妙に饒舌になっている。あまり喋らない方の人間だったはずなのに
「なんでだろ・・・」
ああ、まただ、足は動かないのに口はよく動く。
でも、もうどうでもいいや。
この血の様な液体に浸かっていると、溶け込んでいってしまいそうで…
そこで自分の意識は一旦途切れた。
願わくば、この闇から出られていますように・・・